

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 高橋 茂人

【所属】(助成決定時) 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

【研究題目】 蘭領ティモールの諸王国と戦争経験

### 【研究の目的】

本研究は、オランダ領西ティモールの諸王国が経験したアジア太平洋戦争の実態と、戦争が現地社会に与えた政治・経済・社会・文化などの影響を、文字資料ならびに口述資料を用いて明らかにする。その際に、ポルトガル領東ティモールとの以下の類似点・相違点に留意し、東西ティモールの比較や関係性を考察する。

①西洋到来前のティモール島には多数の王国が存在していたが、19世紀末以降それらの王国を基盤として宗主国に対する反人頭税蜂起が発生するが、宗主国に「平定」された。②この結果、東側から西側への王国・人の移動があり、このことが戦時以降の東・西ティモール関係を複雑化させた。③戦時中は、国際関係上、西ティモールが交戦国のオランダ領、東側は中立を宣言していたポルトガル領という根本的な相違があり、軍政面では西側は海軍民生部、東側は実質的に陸軍第48師団が担ったが、治安管理は全島で同師団が担当した。

### 【研究の内容・方法】

本研究では、西ティモールの諸王国に関する歴史的・人類学的知識を確認した上で、①アジア太平洋戦争期の歴史事実を明らかにする、②西ティモールの諸王国間の関係・宗主国オランダとティモール諸王国間の関係・国境をまたいだ東西ティモール諸王国間の関係など多層的な同盟・反目関係に留意しながら、アジア太平洋戦争が現地社会に与えた影響を解明する、③これらの影響と現在の政治・社会状況とのつながりを分析した。

はじめに、関連文献資料を収集して、西ティモールの歴史背景、特に各王国についての基礎情報を整理した。その上で、7月から9月にかけて約2ヶ月間の現地調査を実施した。

調査地は西ティモールの首府クーパンおよび東ティモールとの国境沿いの地域を中心とした。調査地における文献資料の追加収集はクーパンの大学図書館と州立図書館、およびカトリック修道会神言会の図書館で行った。神言会はティモール島でアジア太平洋戦争以前(20世紀初頭)から宣教活動をおこなっている修道会である。これら図書館では、主にインドネシア語の刊行物を収集することができた。

聞き取りは、戦時期の経験を持つ老人23人と面会することができた。許可を得た上でICレコーダーを用いて録音し、音源を電子ファイルとして保管する一方、文字に起こして口述資料として利用可能な状態にして管理している。加えて、王家の子孫や伝統的指導者、歴史研究者など22名にも、関連情報などを得るために面会することができた。聞き取り時に、個人所蔵の写真や文書などの一次資料も探索した。点数は非常に限られているが、これまでに知られていない資料を見つけることができた。

研究成果は、学会等の場での発表や論文として投稿する一方、インドネシア人・東ティモール人の学生や研究者に利用可能なようにするため、現地の言語(インドネシア語・テトゥン語)で資料集および研究成果として刊行することを目指している。

### 【結論・考察】

19世紀末から20世紀前半にかけて西ティモールではオランダによる「平定」が進み、東ティモールと国境を接するベル県以外では、伝統的な王国の領域が新しい行政区画としてほぼ踏襲された。しかし、ベル県では王国の統廃合が頻繁におこなわれた。ベル県以外の西ティモールでは、3王国ほどが一つの県にまとまっているが、ベル県では最大で37王国にもものぼった。このことが、王国間の対立・競争を煽ったと考えられる。

西ティモールではアジア・太平洋戦争(日本占領期)後に対日協力者への戦犯裁判が一部実施されたものの、王国首長は一切裁判に付されておらず、指導者に関しては戦争前後の連続性が認められた。戦後復帰したNICA(蘭印民政府)は、指導層の対日協力の処罰よりも、戦後の再支配確立を優先させたと思われる。

反人頭税蜂起の結果、東側から移動した王国のひとつであるディルワティ王国が、日本軍に積極的に協力し、東ティモールへの攻撃や、西ティモールにおける野戦倉庫・兵站などの役割を担った。現在のところ、そのほかの東側から移動した王国で、そのような例は見当たらず、ディルワティ王国首長個人の性格・指導が対日協力への関与を深めたといえる。